

# 宗牧連歌の伝流：その「四道」を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1988-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斎藤, 義光 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1549">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1549</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 宗牧連歌の伝流

——その「四道」を中心として——

齋 藤 義 光

近衛尚通の日記「尚通公記」の天文五年九月八日の条に

宗牧来、内々連歌宗匠事、近日宗牧ニ被仰付候者、可為本意之由申大樹処、許容之間、祝著無他とあり、この日の後間も無く宗牧は連歌師最高の榮譽である連歌宗匠に任ぜられ、天文十四年九月二十二日佐野の地で客死するまで、連歌壇の最高の指導的立場にあった。

宗牧の連歌宗匠の地位を得るようになった直接の動機は天文二年四月二十四日の宗碩の死去であり、更には溯って天文元年三月六日の宗長、大永七年四月四日の肖柏の死去である。宗祇とともに有心連歌の世界を支えてきた巨星が次々と世を去った。もちろん宗碩と同郷の士で實質的には宗碩門では宗牧より兄弟子にあたる周桂も居たが、宗牧、宗養父子の近衛尚通・植家父子への密着も有力な要因となったことは事実である。しかし、大阪天満宮藏、大足軒長松の覚書「百事録」によると、天文三年四月二十四日の宗碩一周忌の千句では、近衛植家・寿慶と共に

橘の花ちる庭のゆふへ哉

宗牧

の巻頭句を詠んでおり、また同年七月二十五日〜二十七日の、宗祇三十三回忌追悼千句で実隆・周桂・寿慶等と並んで宗牧は第八「何田」の発句

霧晴て水より寒き雲井哉

宗牧

宗牧連歌の伝流

の発句を詠んでいる。千句全体で出句数平均実隆 16.2 に次いで宗牧 15.7、周桂 15.1 である。宗牧が連歌宗匠の座に就いたのも自然のなりゆきであったのかもしれない。

この宗牧を、長い連歌史の流れの上からみた場合、どのように位置づけるのが最も適切なのであるか、そのことを考究するのがこの小論の前半の課題である。

寛永十九年三月成立の三条西公条の連歌字書「歌道聞書」では、上古を宗祇、中古を宗牧・宗養、当世を紹巴とする当時の連歌史観をしりぞけ、上古を救済等の三賢時代、中古を宗砌・心敬ら七賢時代、当世を宗祇・宗牧・宗養時代としてゐる。また著者未詳であるが、その記事内容から貞徳俳諧の頃から蕉風成立の頃までをその内容とする系譜の書「明翰抄」は、その第四十条で、「竹林抄」の連歌七賢に対応する「中比七人衆」として実隆・肖柏・宗祇・宗長・宗碩・兼載・宗牧を挙げ、連歌史における宗牧の位置づけについての考えを暗示している。また大阪天満宮蔵「呼雲齋宗臨独吟千句」に、大足軒長松の長文の跋文があるが、その一部に

天正十七年霜月十二日としるせり谷氏呼雲齋宗臨と見えたり抑谷宗牧か流をくみたる人か連歌の風体ハさも見え侍ねと谷氏とあるより思ひよりはへる宗牧宗養二世にて業は絶たりと覚ゆれと云々(傍点筆者)

とある。大足軒とは滋岡長松のことで、文化文政の交、大阪天満宮の書記をつとめ、阪昌成等と親交のある秀れた連歌学者であるが、後世の連歌・俳諧にかかわった識者は、現在の連歌研究者の大体の傾向が、宗牧↓紹巴の時期を以て連歌史の完成、あるいは固定期とみなしているのと必ずしも一致していないように思われるのである。

筆者はかつて、宗牧の連歌論を中世の思潮との関係から論じ、観念的・観照的な基本的性格に加えて俳諧的・庶民的性格をも指摘した。<sup>注1</sup> また最近宗牧の「月並千二百韻」を中心として、独吟千句及び発句重視による季感意識と文芸化の傾向について論じてみた。<sup>注2</sup>

前記長松の跋文で、宗牧・宗養二世で連歌の道が途絶えたというのも大胆な発言であるが、その後文で、続いて、宗臨

の千句に触れ、

宗臨老の独吟歎又一日千句などの早吟とも覚ゆる也

は、右の小論の要旨と全く符合する内容と思われる。

山田孝雄氏も烏丸光広の「耳底記」の

もののこまやかになりたるは、宗牧からなり。

などに触れながら

宗牧時代から連歌の風に多少の変徴を来したと考へらるる

と重要な暗示的指摘をしておられる。<sup>注3</sup> 島津忠夫氏なども指摘しておられることであるが、連歌学書の俳諧の伝書への傾斜の問題も、宗牧―宗養―紹巴の期を、宗祇以後の正風・有心の連歌の視点からのみ論じていたのでは、近世初期から中期にかけての連歌師や俳諧師が文学史を溯行しながら論じている立場を理解しにくいのではないかと考える。以下論点をそのような方向に進めてみたい。

山田孝雄氏は右の宗牧連歌の変徴の指摘に続いて、その原因を連歌師の世襲に求めている。すなわち

宗牧・宗養は二代で止んだが、兼載の後の猪苗代家、了派の後の石井家、昌休の後の里村家はいづれも世襲の連歌師として明治に及んだ。

という。この宗牧と宗養との関係については木藤才蔵氏が

連歌界に名門意識が生じ、世襲を尊重する機運が生じてきたことを意味している。宗牧が宗養を自己の後継者として養成したのも、昌休が宗養をもりたてようとしたのも、近衛植家・三条西公条・大覚寺義俊・三好長慶等の好士が宗養を庇護したのも、名門意識と無関係ではなかったように思う。<sup>注4</sup>

更に最近に至ってはこの宗牧父子の在り方を

宗祇以後の連歌の世界が、次第に作者個人から家の学として変質して行くことを予感させるものになっている。と、名門意識とは近似ながらもやや異なる「家の学」という現象から指摘している。

小西甚一氏はその著『道——中世の理念』の中で、

そもそも「道」とは、専門を意味する語であった。たとえば「木のみちの匠」(源氏物語「帚木」)とか「琴・笛のみち」(同「東屋」)とかの用例がそれを示す。すなわち、ある分野について特別な修練が経た者だけが実践可能な世界であり、その世界で合格点に達した者は「みちの人」(宇津保物語「吹上」下)とよばれた。このような専門性は、それ自身を保持するため、長い時代にわたり承継されてゆくことが要件とされた。その継承を可能にする実践の単位は「家」であり、家が継承されないところに道はありえない。<sup>注6</sup>

すなわち「家の道」とは、本人の自発的なきびしい熱意と研究と修練とが要請された。小西氏は「道」の要因として、右の専門性・継承性のほかに、「軌範性」「普遍性」「權威性」を挙げる。道の家に生まれた者は、このきびしい条件を身にそなえることを要請されたのである。筆者は、この和歌や芸能の世界における「道」の意識をもっと人間の生き方の根源に求めたものは心敬の「仏道」であったと思う。しかしこの「道」の意識も、近世に入ると、道のきびしさはいくらか後退し、既に存在する軌範への随順よりも個人の意思や感情を直接に表出しようとする傾向が強まって、全般的には「人情」という理念が焦点となる、と小西氏は指摘する。「道の学」の性格をこのように考えた場合、「家の子」としての宗養の三十八年の歩みをどう評価したらよいか、が次に問題になる。

宗養の作風については

宗養連歌、いかにもこまかにありしなり。それがもとめたるやうなる事は一円なかりしなり。ただいつもの荻の上風など云ふなることなりしなり。それがまことによいものが出たよ、これでなうてはと思ふやうにありしなり。

には「萩の上風」の引例にみられるように、一見平凡な素材の中にその本質的よさを詠むなど若さに合似わない円熟の芽を感じさせる。

宗養ほど、連歌をくり返し案じたる人はなかりしが、又速くせんとおもふ時は、執筆のふでもひかぬにはやあそこにありたると見えてありしなり。  
〔『耳底記』〕

からは、筆者が既に論じた当時注7の独吟と千句を中心とした早吟の傾向をも身につけていたことが知られる。

天文十年三月、十六歳の折、宗養の作品としては初見と思われるが、「発句夢想宗養独吟」なる追悼百韻を詠んでいる。太宰府天満宮小鳥居家本及び天理本によると発句

ちりてなを花にまされる庭の雪

御

で、脇句以下が宗養の独吟であるが、大阪天満宮本では滋岡長松はその跋文で

此百韻をうつし侍るに何やら兼載の翁のおもかけも浮ひ侍りてなつかしきものなるへし

と記している。宗養の当時の連歌壇における作風については、常に紹巴との対比において論じられるのが普通である。

(紹巴)

かりにも深き事を嫌、いと浅くのみ導ければ、天下に連歌という物は、つたはりけるなり。連歌の上品を論ずる時は、宗養迄にて、其後断絶也。  
(三条西公条『歌道聞書』)

長松の説は、公条の言を祖述するようなかたちであるが、このように父宗牧譲りの作風のみではなかったようである。

追悼

はなををきてさめしもあやな春の夢

宗養

大阪天満宮本に依るもので、天文二十年、宗養二十六歳の時、進藤山城守貞治の死去を悼んでの独吟であるが、その長松の跋文に

此一巻はさきの一巻とは少し後のもの歟宗養新風を起されしころのものと覚ゆる也此人は其ころのきどく也今にをし

あふくへき歎と覚え侍り

長松

と記している。「さきの一巻」はいうまでもなく「ちりてなを」の百韻を指している。十年の年月を経ており、作風に変化があるのは当然であるが、彼が二十六歳のころ新風を起したという指摘は重要である。

宗養は、連歌作家として自己の個人的技能を磨いていただけでなく、天文十四年、二十歳で父を失うまで、絶えず父に随伴しながら、宗匠として人々に接する人間の在り方も身につけていったように思われる。

宗養ほどなる連歌師もいでくまじきなり。連歌あひよかりしなり。人の連歌などを卒爾になほしなどする事をせずいかにも案じて面白くあるなり。猶よく／＼案じて御覧あれ、かみあはせてみれば、かう遊ばしたらばまさるべきなどゝいうて、いかにも思ひ入て吟じてありしなり。

〔「耳底記」〕

宗養が、天文十年秋「和漢百韻」で父宗牧と同座して以来、天文十四年宗牧死没の年の五月八日「何路」百韻まで、「無為」の名で前後六回同座しているが、その殆んどが出句数1又はそれに近いもので、執筆の役をつとめさせられている。彼は父と共にしたわずか五年の作家生活の間に、連歌作家としてのみならず、宗匠としての知識と教養の基礎を身につけたものと思われる。右の「耳底記」の批評のことばの中から、連歌師としての指導の能力だけでなく、他者の人格と作品を尊重する宗養の人間性がしのばれるものである。後述するが、宗牧在世の時勢と異なり、複雑な政局と共に微妙に移り行く連歌壇の作風に対応することのできたのもこのためと思われる。「歌道聞書」の次の挿話は、宗家の温厚な風姿とは異なる宗養の厳しい一面を示すものといえる。

宗養在世の時、連歌ありて、翌日宗養の弟子何某とやらん、宗養のがりゆきければ、きのふの懐紙再見してゐけるを、「いかなる秀逸も候やらん」と問ければ、「されば、きのふの連歌に、一村薄霜の下折 とある前句に、紹巴、小山田の畔の細道崩そひ と付られたり。此前句連歌にて候、いかなる風情も有べき所に、紹巴などが、かやうのてづつたる事せられては、もはや連歌の道は、廃はてたる事、歎かしき時にや」といたみけるとぞ。

連歌師を専門とする者にとって、「連歌の道は、廃はてたる」の批評は致命的といっても過言でないであろう。

宗養は近衛植家・三条西公条など公家の親交を受けると共に、三好長慶・細川藤孝・武田元信・大内義隆・尼子晴久・浅井正慶などの守護大名と交わり、その連歌指導にあたり、連歌書を書き与えている。宗牧も当然のことながら多くの武将とのかわりを持ったが、室町幕府のそれなりの安定下の交わりであった。それが宗養の時期には、短い期間に急速に情況が変化し、室町幕府も末期症状を呈し、全国的に下剋上の状態となった。宗養が交わった代表的武将である三好長慶は、管領細川家の家臣でありながら、主家を倒し、近畿に覇をとまえ、天文二十二年には細川晴元から將軍足利義輝を奪い取り、自ら傀儡將軍としたが、身内を次第に失い、宗養が没した翌永祿七年宗養より四歳年長の四十二歳で没している。永祿六年八月、長慶の嫡子義興が二十二歳で謀殺され、宗養は自ら追悼の百韻を詠んでいるが、皮肉なことにその三箇月後の十一月、宗養自ら世を去った。また永祿三年には父宗牧以来ゆかりの深い越前の朝倉義景を訪い、親交を深めている。このように宗養の時の武将との交わりは宗牧の時とはまた異なる困難を伴ったが若い宗養はよくそれを克服したといえる。

季吟はその著「誹諧用意風躰」で

正親町院の御時三好長慶朝臣、宗養を師とし、連歌を軍中にもてあそはれ、天正年中に明智日向守紹巴を宗匠とし、連歌を好まれ侍し、其比ほひ連歌のさかりにはありながら、時代おたやかならず、日々に逆乱のほどなりし、当代四海太平にして万民安楽の時云々

と、しみじみと同様の感慨を洩らしている。日本の中世において、全国を旅した代表は時宗の僧と連歌師とであったと思ふが、宗牧父子はその代表であった。特に宗牧は、北は関東から南は九州の果てまで足跡を残している。今日、僻地の意外の場所から秀れた懐帛が見い出されるのは之等の努力に負うところが多いと考えられる。そういう意味で後世連歌に与えた宗養の意義は宗牧と共に深いといえる。



これらの武將に宗養はいろいろの連歌学書を与えている。天文二十年には宗牧の「連歌扱善集」を書写し、尼子晴久に与えている。天文二十四年には宗牧・宗養共著に成る「連歌秘袖抄」を長慶に与えている。また弘治元年には書陵部本「三好長慶宛書状」を、また某年には宗牧の著である「闇夜の一燈」を書き与えている。

連歌作家としての長慶については、永禄五年三月五日、飯盛城での連歌興行中、弟義賢の戦死の報に接しながらも、いささかも動揺することなく

芦にまじれるすゝき一むらの前句に

池水のあさきかたより野と成て

と付け成して一座の賞讃を得た話は、既に説話化して伝えられているが、特に宗養との関係については、彼と極めて近い位置に居た三条西公条がその著「歌道聞書」で

宗養は、光源院殿御時代にて、三好殿兄弟、連歌の達人にて、宗養を執し申され、師匠と仰ぎ崇れたる事なれば、いまだ上たる人に連歌ありたる時節也。

と述べていることは信じてよいことであり、更に、長慶に継いで宗養が交わりを得ていた文人武將細川幽斎の「耳底記」に

一、雑談に、あたぎ（安宅）冬康が連歌は、ぐつとあちらへ、つきとほすやうなる連歌なり。修理大夫連歌は、いかにも案じてしたる連歌なりしなり。

と三好一族の連歌に対する宗養の影響を暗示しており、又貞徳の「戴恩記」に、紹巴が、長慶の斡旋により宗養に近づきを得て両吟の機会を得たこと、宗養の死去によって漸く紹巴が連歌壇の指導的地位に立ち得たことなどの記事から、貞徳派と紹巴流との軋轢から、微妙なニュアンスで書かれていることは考慮しなければならないが、宗養と当時の中央の武將

の雄である長慶の交わりの程は知ることができると思われる。なお長慶と宗養とのかわりについては奥田勲氏の好論に詳しい。<sup>注8</sup>長慶が宗牧と一座したのは管見に入った範囲では範長の名で出句していた天文十一年六月十一日「何木」百韻一回だけであるが、宗養と同座したのは、天文二十年より永禄六年の間十九回に及ぶ。在世の年代のずれからいって当然ではあるが、宗牧の長慶への影響は宗養を通じて、その連歌字書の説などを学んだと思われ、以下に述べる実情等から推しても、天文後期から永禄へかけての宗養の連歌壇への影響は極めて強かったものと思われる。貞徳の弟子の安原貞室（正章）の筆に成る「貞徳翁終焉記」によれば

十とせあまりかなたに半松斎宗養より、みよしの近作、長慶公へたてまつり給へりしつらね歌のこかきたりしふみ三帖、御けいし松永霜台伝へたまひて、甥の永種うけつぎ、此翁にわたし給へりしを、みづからにたまひぬ。

これによれば、宗養—長慶—松永久秀—永種—貞徳—貞室の系譜を持つ連歌の伝書の存在も考えることができるのである、このことは、この小論の後半の主題である連歌伝書の俳諧伝書へのかかわりの問題にも波及していくものと思われる。長慶に継ぐ武将の藤孝（幽斎）の場合も、弘治二年—永禄六年の間宗養と同座したのは僅かに六回であり、これでも宗養—長慶のかわりの重要さを測ることができる。

宗養の学風は、「家の学」という前提から父宗牧の意見をそのまま祖述し伝えたかの如き印象を与えているが、必ずしもそうばかりとはいえない。

誰に書き与えたかは明らかでないが、宗養の手に成るものに「宗養より聞書」がある。その大半は既に指摘されているように宗牧の「当風連歌秘事」の説に負っているが、同書と異なる部分に宗養の連歌論を考える上で重要な部分があるように思われる。宗養の連歌史観にかかわるものでは、連歌の歌体について宗祇の六十二体及び宗長・兼載に加えて、宗砌の遠白躰・写古躰・抜群躰・有謂躰・強力躰・平懐躰、心敬の幽玄躰・有心躰・不明躰・秀逸躰・物哀躰、専順の高山躰・花麗躰・存置躰・秀逸躰・景曲躰・半臂躰、兼載についても具体的にくわしく長高躰・有心躰・麗躰・辟喩躰・見躰・親

句躰・明白躰を挙げ、自らの史観に伝承の重みを加えようとしている。また「字あまり」の項では、寿慶の「むかしの友や夢の暁」の付句を宗碩が褒美したことに続けて次の文がある。

菟玖波集に

うぐひすさそふ風の長閑けさ

と云句に、一品式部卿親王

氷とけて打出る波の谷の戸に

是等は冠ながし、腰がらみ、両字あまり侍れ共、口にかかる事なし、上手の物はみな如此、或は

長き夜に猶古郷をおもひ出て

是は誰もする字あまり也

花ちりて人はとまらずいかゞせん

此襲引の句などは人によりてつかふまつるべしと也、字あまりを所を替て打越を嫌ふ事にや。

宗牧の論がともすれば論理的・観念的であるのに対し、極めて具体的・実作的な内容を追記している。事例も新撰菟玖波集を避け菟玖波集を採りあげているのも織豊期俳諧の雰囲気を顧慮していることかとも思われる。宗養の加筆又は修正の中で特に重要なのは、発句に関する後半の次の部分である。

されば千句などには上手達に脇をさして、第三をばをろかなる人につかふまつらする物也と亡父もをしへをかるる儀也、然といへ共脇句は亭客の礼儀相定物也、又第三は姿心をかへて長高可然候、季の詞第三まで尤候、四句目は季を替、雑句尤候歟、又第三は、発句脇の韻の字を見合て、らんとも、ても有べし、宗長は発句に哉ととめ候はば、第三に、てととめざるよし沙汰有しと也。かなは、にてと云心也とて嫌はれしと也、聴雪、宗碩は不苦といへり、昔の先達の連歌を見るに、いか程も哉と云に、にてととまりたる第三なし。されば今に京中其さたなし、千句初百韻かならず、

て・覽ととめ侍るべし、にけりは一旬也。

発句については、「連歌採善集」を中心として宗牧の最も得意としたところであったが、その父の意見に異見を挿んでゐるのである。特に千句を主として論ずるなど、当時の連歌壇の実態に即しての論と思われる。その他「夢想連歌」や「名号・経文連歌」など、順序が入れ替つてゐるが、内容的にはかわりがない。

宗養が武將に書き与えた連歌の書状では、弘治元年八月一日の三好長慶宛のものが代表である。弘治元年は宗養三十歳、父宗牧没後十年を経て、独力で連歌壇をリードする心境も漸く安定してきたころと思われる。この書状も宗牧や伝統的な連歌論書に基づいている部分が多いことはいうまでもないが、宗養独自の意見もかなり見られる。このことについては奥田勲氏も既に指摘しておられるところであるが、全体三十二項目のうち、はじめの四項目は長慶向けの内容である。

一、御会席之儀、公家門跡御参会に一順を被遊候者下句可然候云々

一、先御連衆を御つもり候て、分句を可被遊候、三四の番に成て二三句づつも被遊可然候、是故実也云々

一、門跡の御会には句数不足を被遊可然候幾度も御催促次第可被遊也云々

一、執心により町人などの類を連衆に食出され候はば、節々御催促可然候云々

当然のことであるが塚等の町人も当時は連衆の中での重要なメンバーであり、第十一項の六儀の条でも

惣而貴殿などの御句をば少々は聞届す候とも面白とほめ、たつとく可申候間、其程を御はからひ候て町人なりとも劫者のかたへは、かやうにはいはれまじきかと、御尋は、返々堪能のもとひにて候

と、町人も相手によつては配慮あるべき事を指示している。

また本論文の後半の中心である宗牧の付合論の特色である「四道」についても、管見に入った範囲では宗養は言及してないのである。本書状では第九項で、付合の四分類として「序正流通」を挙げている。

一、歌にも連歌にも、序正流通とてあり、まづまへ句に序分の心あらば、付句に正分と付なすなり、三句めは、又流通

分とてあさく／＼と付成事、五議のさたといふ也、経をとくにこの心持有べし云々

このように、宗養は、宗教や伝統的論書を祖述するだけでなく、連歌作風の推移や相手に応じて教示による自らの説明も考案しているのである。

宗養の特色ある論書に「天水抄」がある。「天水抄」の諸本については伊地知鉄男氏の諸本についての解説があり、第一類がいわゆる宗養・昌休著といわれるもの、第二類が松永貞徳から良徳への伝書、第三類がいわゆる板本「天水抄」で良徳の再編と考えられるものである。ここで取り上げるのは第一類に当たるものであるが、この伝本については奥書の永禄四年には昌休が在世しないことから、たとえば木藤才蔵氏は宗養↓永種又は貞徳の伝書の推定を立てておられる。この第一類の「天水抄」には多くの異名があるが、その一本に大阪天満宮蔵の「休養遺書」がある。その表表紙の裏に

昌休 天文廿一年死永禄四年者凡十年後也此書ニ昌休ト記セルハ恐ク昌叱ナルヘシ

と、大足軒長松の筆と思われる書き込みがあり、巻末の起請文のあとに

永禄第四十一月八日 昌休<sup>叱ナルヘシ</sup> 干時 廿三歳

宗養 干時 三十六歳

とあり、このあとに文政七年六月五日付の長松の書写の識語があるので、「叱ナルヘシ」の書込みも長松の筆と思われる。年齢の推定も正しく、宗教→宗養、宗教→昌休、昌休→昌叱、の三者の人間関係から、宗養・昌叱共著が最も有力に考えられるが、既に述べた「貞徳翁終焉記」の中の宗養→貞徳の伝書の存在も予想され、いずれにしても宗養流の後世への影響の意外に厚いことが知られる。

三条西公条はその「歌道聞書」で、

七十まで寿を保たらば、宗祇に及べからん物は宗養也

とあり、いさゝか過褒かとも思われるが、公条は昌叱に「源氏物語」を伝授したりしており、必ずしも宗養一偏倒であつ

たとも思われない。山田孝雄氏も宗養について、達人の風があったと想像される、と述べておられる。

宗牧の連歌書は多くあるが、連歌作者のための実作の指導を懇切に説いたものと、独特の深い思索と組織力による論理的学書に分けられると思う。前者の代表作は「当風連歌秘事」であり、後者の代表作は「四道九品」である。いずれも連歌研究における諸先輩の秀れた説明もあり、「四道九品」については筆者も前掲書で触れたが、殆んど九品についてのみ論じ終わってしまったっている。小川幸三氏のすばらしい論述があるが、これも九品の論に終わっている。注11この小論では、宗牧の「四道」の後世への伝承のあとを追って、特に俳諧との関わりを可能なかぎり探ってみたいと思う。

「四道」の名称は、「四道九品」の冒頭に

抑今の世の連歌へ詞を道とせりあさましき事也  
积尊世に出て御法を四方にひろめ給ふも第一法花をとかんため也

以下本書の主題である心主詞從論を展開しており、この四道も仏門の加行道・無間道・解脱道・勝進道に因んだものかと思われる。なおその内容は、既に指摘されているように、多くの諸先輩達の付合の分類の複雑化したものに、宗牧独特の原理を立て四類型に整理したもので、これが九品の品等論と組み合わせることによって百韻の序破急の構成に、変化と統一を与え易くしたものであった。なお、四道の序次及び例句は次の太田本の系列に拠ることとする。

添(そふ)

をとする水はこほりとけけり

雪うつむ深谷の小川春さへて

随(したがふ)

時のまにいたるとそきく西の空

もろこしまての春のはつかせ

離（はなつ）

たもとにかすむ有明の月

鳥のこゑ花のほひに山こへて

逆（さかふ）

なく鳥もあはれとやミン谷の庵

夕かせあらしはなのしたかけ

「四道」の語がその後文献に見られる最初は、「多聞院日記」天正十二年（一五八四）五月四日の条である。

一、連歌、四道ト云事大事在之、宗祇書集抄所持ト云々、世上一向無之云々

これによると、「四道九品」は当時に宗祇作と伝承されていたようである。「多聞院日記」は興福寺多聞院の僧英俊等が中心となり書き伝えたもので、文明から慶長に至る、政治・文学・宗教等にかかわる貴重な文献であるが、文中の「世上一向無之」から、同書は当時に希覯本となっていたものと思われる。寛永十八年（一六四一）正月廿五日奥付の徳元の「誹諧初学抄」でも「宗祇公、角田川に書れたり」となっている。なお同書の四道説は心の誹諧、詞の俳諧の十牀論となっていて宗牧の四道とは全く異なる。

「四道」の語がその後文献に見られるのは寛文十年（一六七〇）開版の、伊地知鉄男氏分類の第三類にあたる板本「天水抄」である。同書は前掲資料集に影印されている東大図書館本の他に、太宰府天満宮西高辻家本の中に「連歌手本」の書名の写本が存する。西高辻家本は次に採り上げる四道の項の中に落丁一丁あり、書写者自ら頭注にその旨記し残してあるが、内容は、伊地知氏の解説にもあるように、宗養や貞徳の「天水抄」を書き抜いたものと思われる。

#### 第五 四道之事

たとへは本歌をとるに言ハむかしのことくなるこゝろを取かへて新敷句作りすると也。たとへは心あてにおらはやお

らんの哥を去人の発句に

心あてにやおらはやおらん売扇子

以下、本歌あるいは漢詩の句をふまえながら、心と詞とを換骨脱胎することによって四通りに組合せする作句の発想法であつて、宗牧の付合せの四分類とは全く異なっている。例句も連歌というよりは誹諧の発句となつてゐる。この項の文末に  
此四の道ハ詩ノ七言四句にもかよひ又天台四門ノ有門空門非空門亦空門ノ四品ト同シ仏祖別伝の一大事也哥の返しに  
四の道あり末にしるす懐昏四枚も此義を以て也六義ハ六ノちまた四道ハ四生也此四道連誹二ツの第一の秘事也  
とあり、当時の論書に見られる大形な権威付けをしているが、四道の語が、宗牧が用いた意とは別に用いられてゐたことが知られる。

次に「四道」の名の見られる文献は、延宝元年（一六七三）十月の奥付のある北村季吟著改稿本「埋木」である。同書は、貞徳亡き後、俳諧宗匠として貞門俳壇の指導的立場に立つた季吟の、一連の論書の中心的性格をなすものである。この書の意義については、尾形竹氏註12の解説にくわしいが、当時次第にその立場を強めてきた談林俳壇に対し、貞門俳諧の重みを具体的に示そうとしたもので、和歌連歌等の先行学書を博搜したものであるが、季吟の偉大さは、その博学な学殖だけでなく、それを俳諧に正しく位置づけたことであつた。たとえば、宗養の「連歌秘袖抄」を発句の切字、てにはの写本にしたのは、同書は父宗牧からの相伝の書であり、その宗牧は「連歌扱善集」で発句のみに関するすばらしい論を示しているのである。この改稿本「埋木」の巻末に近く、四道について次のようにいう。

付句に四道といふ事あり。

そふ・したがふ・はなつ・さかふ

そふとハ、前句の詞にかいそひて、山に麓・杣などつくる也。したがふとは、前句の心にしたがふ也。はなつハ、前句の詞にかけはなれて、とりなしなどやうに、あらぬ物につけなす也。さかふは、桃咲といふ前句に、梅ちるなどつくる心



ばへ也、毎句此心してつけ候へば、うちの輪廻（わんじゆ）をのがれ候と也。

八十躰などの風躰とかゝわることなく、純粹に付合いの論として取り扱っており、作例こそないが、その四道の解釈は宗牧のそれと全く同じである。なおこの四道の記事は、同書の初稿本にあたる「誹諧埋木」には見られないもので、恐らく初稿本普及後、所々からの意見を配慮し、新たに入手した資料を加えたものと思われる。同じ貞門の中でも、既に述べた如く貞徳の直系には四道の正しい伝流が無いのに比し、本流の秀れた学書に抛りながら、自らの学問を体系立てたのはすばらしい。更にこの書で重要なことは、同書の四道の記事の直後に、次の奥書があることである。

此書雖為家伝之深秘宗房生依誹諧執心不浅免書写而且加奥書者也必不可有外見而已

延宝二年弥生中七

季吟

文中「宗房」とは若き頃の芭蕉である。芭蕉が季吟に就いて古典文学についての深い知識と教養を身につけたことが、後年彼の文学の世界を偉大なものにした重要な要因となったことはいままでもないが、彼の学んだ古典学の中に宗牧の四道の理念が生きていたのである。

蕉風俳諧のところで、「四道」の文字が早く見られるのは、元禄二年（一六八九）文月五日の奥書を持つ「聞書七日草」である。同書は、芭蕉が奥の細道の旅の途次、羽黒に滞在した折、弟子の図司呂丸が芭蕉の教えを筆録、それをもとに美濃派の俳人竹童が編述したもので、全体に竹童の扮飾の跡が見られるが、基本的なことは採ることができると思う。同書では、四道・六座の題目の下に、四道については、添附・随附・放附・逆附をあげている。

添 前句に打添へて附くるなり。前句の位を見はからひて、中よくつれ添ふ姿なり。

随 前句に随ふなり。いかにも前句にこたへて、前に言ひ残りたるをつぐなり。

放 附け心つづきたる時、前句の心を離れて、さて又前句へもうつり候やうに心得候なり。

逆 前句を争ふて、それとこれと別々に附て、さて下心よく附るなり。

右の「聞書七日草」について、能勢朝次氏は蕉風連句の附け方を論じた中で次のように言及しておられる。<sup>注13</sup>

かやうに、位や佛などが、細やかに、句ひ・響き・移り等に結びつくことによつて、その句は一層に具体性が増し、附句としてのはたらきに於ても、その力を増して来ることとなるのである。

と結論的にまとめられ、更に附記のかたちで

蕉門の伝書の中には(附方の)さまざまの名目あげられているが(中略)それらの中、土芳のものや『聞書七日草』などにあらわれてゐるものは、芭蕉の用ひてゐた名目を伝へたものらしく思はれる云々

と述べられ、四道の名目及び「聞書七日草」の解釈の仕方も貞門以来のそれに従つたままであろう、としておられる。氏によると、四道の方法は、蕉風連句附け方の中心ではないまでも、句ひ・響き・移りなどの中心的附け方を補つて、蕉風連句の移り行きや構成を多彩にする重要な役割りを果たしていた、と考えられるようである。

最後に大阪天満宮本「連歌括要抄」について述べる。同書は、従来静嘉堂文庫本「連歌提要」の異本として扱われてきたが、著者・書写者や四道の記述のあり方などから、前者を主として述べることにする。両者の記述内容は極めて近く、「連歌提要」は上巻四十条、下巻六十条から成り、四道は処々に部分的にふれてはいるが、下巻冒頭に纏めて記されている。著者は「法橋蝶庵」とあるが、明らかでない。福井久蔵氏は「井上蝶庵」とする(「連歌の史的研究」)。

「連歌括要抄」の奥書は次の通りである。

右括要六卷者世々宗匠輯雅言及而於則以相承之書也然蕉翁与之杉風風家泯此道之義給之腐十二磊今茲我門人千亮私淑而模写之欲以予証焉予雖在病床閱此書而即知先哲之指粲然而此道之一助矣因使雲堂書其歸爾寬延辛未歲初夏

此書本文二六庵竹阿写之判

一練窓 馬光判

之によると、芭蕉がこの書を門人杉風に与えたが、杉風一族が之を粗末にして虫損をしたので、馬光の弟子千亮が書き写したものに病床の馬光が加筆し、それを二六庵竹阿が書写したことになる。馬光は、長谷川素丸そまる。其日庵とも称した。江戸本所に生まれ、素堂に入門、後、沾徳に学んで「五色墨」の活動の中心になった人物である。享保二十一年号を一練窓馬光と改めている。浄書者竹阿は江戸葛飾派の俳人で、二世素丸を助け、「続五色墨」の刊行（寛延四年）の中心となった。寛延四年は、「連歌括要抄」が書写された「寛延辛未」その年である。竹阿は一茶の師として強い影響を与えたことは有名である。このように考えると、この書の伝承は信じてよいと思う。

本書の各項の説の論拠の大部分を宗祇の角田川・長六文その他に求め、所々心敬や肖柏の論を引用して權威づけをしていることはいうまでもないが、本書の特色は、宗牧・昌休・宗養、特に宗養の説が多くひかれていることである。また作例には特に宗養の句が目立つ。「休養時代」「休養両説」という語も処々に見られる。冒頭「発句之事」では宗祇の「角田川」から始まるが、宗牧の「連歌括善集」の説が長文に亘って引用されている。

「連歌括要抄」はその全体の組織が「連歌提要」と些か異なり、全体六卷より成り、第六卷は附録の形で、てにをは、有文無文、四道など特に重要と思われることを再説している。四道については卷四の冒頭と第六の第二十一条に述べられている。

#### 卷之四 第一 連句四道 附句大意

連歌にも六義十牀八十牀其外種々の附やう有といへとも專要とすへきハ四道也四道と云ハ添随離逆也連句根元也

而於則第二十一記之

前句

むかしを忍ふ袖そ露けき

里霞む花のミ独り匂ふ野に

武蔵野に秋の幾日を送るらん

壹か軒端の有明の月

隨

日影しつかに鶯そ鳴

山里の霞む朝戸に雪消て

離

時の中にひるとそ聞西の空

もろこし迄の春の初風

同

もとの涙に帰るをく山

鹿そ鳴妻（つと）飛野にや明ぬらん

逆

我はひとり秋の悲しき

今宵月誰か手枕に晴ぬらん

不知四道連歌者偷如夜行無燭と云々

卷第六 第二十一 四道の事

添從難逆

(前略) 添句も二句つゝかハ別に付なし従句も二句つゝかハ又余の方へ付なし離句もつゝかハ別に付なし去ながら離

ハ連歌の命にて転して行ハ多くつゝきてもくるしからず然といへとも一面にあまり同しやうに行ハ不好逆句ハ二句より外ハ宜しからず耳に立物也当世ハ句作むつかしきを嫌ふ也三代集の中にも次第にかろくなり五代集又く如此二十一代集も末く程軽く打聞へて面白きやうによみ来る也此風味末世の心に相応せり連歌困しかるへし但し当世も上手は一廉ありて耳に立句もすへし作意を廻らす上にするハかるき也上手をにせ耳に立句初心の時ハ思慮すへし

・添句 山に麓 嶺に梯 浦に藻塩 (中略)

・又心の添句もあり

宗牧連歌の伝流

花に名の花 名鳥に名鳥（中略）

・ 従句とハ 嵐に花の散 風止る船出（中略）

・ 離句とハ引句の体にて顕然なり（中略）

・ 逆句引句の体に顕然たり。此外様く〜に付

様有といへとも大略四道の趣を出へからず

と四道のそれぞれについて極めて具体的に説明している。このあと前掲の例句が再び示されているが繁雑になるので省略する。

以上要するに、連歌の後世の俳諧への影響は、例えば付合いの四道などを中心としてみた場合、芭蕉俳諧への滲透はもちろんのこと芭蕉を通して蕉風以後の俳壇へも実作の上で深い影響を与えたことが推察されるのである。頼原退蔵氏が、

心敬が風体の最上とした「ひえ・やせ・さび」が、後の芭蕉の「さび・しをり・軽み」に通じると指摘され、山本健吉氏

が、心敬の疎句の理論が芭蕉の「句ひ・うつり・響き」の方法を導き出している述べられてから、既に久しい。<sup>注15</sup> 近くは乾

裕幸氏により、俳諧における疎句論が更にくわしく分析されている。<sup>注16</sup> しかし心敬と芭蕉との二百七十年の距りを、中間で

繋ぐものとして宗牧・宗養が明瞭には措定されていなかったように思われる。その連歌の影響も、宗祇以後の代表的連歌

師を祖と仰いだことは当然であるが、例えば季吟がその「統連珠俳諧用意問答」で

紹巴などの独吟の俳諧百韻今に残伝るを見るに、ただ口ずさみにいひなしたる故にや、是連歌師の俳諧とて翫ふべき

ところも見えず。

とまことに酷評であるが、縷々述べてきたように宗牧・宗養の説が後世俳壇に深い影響を与えていることを知るのである。これは貞門俳諧の古典重視の故ばかりでなく、紹巴流の本意の固定化と繁瑣な式目に、自由さを求める俳諧からむしろ抵抗があつたのかとも思われる。また談林の論客岡西惟中の「近來俳諧風駢論」にみられるように、貞門と談林、さら

には同じ談林の中での流派の違いによるものかとも思われる。第二には、父宗牧の教えを守株したかにも見える宗養が後世むしろ尊重されており、ある意味では宗牧の遺風は宗養の存在によって後世に花開いたともいえないことはないと思われる。

- 注1 斎藤義光「宗牧の連歌論と中世思潮」(『中世連歌の研究』所収)  
注2 斎藤義光「宗牧の独吟千句」―月並廿二日韻を中心として―(『大妻国文』18号)  
注3 山田孝雄「連歌及び連歌史」  
注4 木藤才藏「連歌史論考」  
注5 奥田勲「日本文学新史」中世編  
注6 講談社現代新書 No.370  
注7 前掲論文  
注8 奥田勲「三好長慶」(『中世文学の研究』所収)  
注9 前掲論文  
注10 伊地知鉄男編「連歌資料集2」(ゆまに書房)  
注11 小川幸三「四道九品」にみる九品の性格」(『中世文芸』第50号)  
注12 尾形仵校「季吟俳論集」(古典文庫51)  
注13 能勢朝次「芭蕉の俳論」(俳文学叢書8)  
注14 頼原退蔵「心敬と芭蕉」(『俳諧精神の探求』所収)  
注15 山本健吉「座の文学」(『古典と現代文学』所収)  
注16 乾裕幸「付合の消長」(『芭蕉の本5』所収)